Breathing Life

(人生の瞬間を呼吸て生きながら)

鄭　京姫（チョン　キョンヒー）

１．動機
２．インタビュー
　戦争の中で
　人生を楽しむこと
　自分に感謝
３．結論
４．終わりに

（1）動機

「おいくつですか？」こんな質問はやめて。誰かに年を聞かれるのはもううれしくない。鏡の顔はシワが目立つ。女の人が３０歳になるのは、死刑を待っている罪人のように、時が止まってほしいぐらいなの。何か世界が変わってしまいそう。何かが起きそう。不安で落ち着かない。年を取るのが嫌だった。いや、怖かった。この人に出会う前までは。

「えっ、６９歳ですか？」・・・ということは、もうすぐ７０歳になってしまうんだ。
３年前、今のアルバイト先で小林さんと出会った。私の仕事はおにぎりを作る会社で、いろんな商品のラベルを作っている。私は夕方６時から１０時、おばあさんは夜９時に来て夜中３時までのいわばパート同士だ。この７０歳にもなるおばあさんと仕事できるのかな。『７０歳』ふと思うと、白髪で、チマチョゴリで、いつも厳しい顔のおばあさんが浮かぶ。父のお母さんだ。母方の祖父は独立運動家で母が赤ちゃんの時に、また祖母は私が子供の時亡くなって、まったく覚えがないのだ。私の唯一の祖母へは孫として甘えたり、かわいがられた事がないためか年寄りに対して怖いイメージしか持っていなかった。人生って、７０歳まで生きるのは嫌だ。太く短くそして、充実した生き方をして死んだほうがいい。こんな考えを持っている私の目の前に、いきなり７０歳にもなるおばあさんが登場したのだ。まいった。おばあさんとは嫌だな、いじわるくされたらどうしよう。辞めちゃおうかな。
「今度の日曜日、昼ご飯でも食べに行こうか」「はい」。一緒に仕事を始めて一週間後、おばあさんから食事の誘いを受けた。－どうしよう。返事はしたけど、おばあさんと何の話をするの、しかも二人きり。－その日は帰宅してから、日本語の文法の本を探して『敬語』

を覚えた。「韓国の焼肉よりおいしくはないけどね」「いいえ、おいしいです」。初めてのデートは焼肉屋だった。何時間が経ったのかも忘れたぐらい、いろいろな話をして、楽しかった。後で分かった事だがおばあさんは、肉はあまり好きではないそうだ。多分、韓国人である私のために焼肉を誘ったのと思い、申し訳なった。その後、私が体調を崩して入院していた時には、何も食べられない私に「柔らかいお粥からでも食べようね」と、ずっとそばにいてくれた。それ以来、小林さんと私は時には母娘のように、時にはおばあさんと孫のように、時には恋人のようにデートをしたり、お茶をしたりしている。

小林さんは、某有名会社を定年まで勤め、今の仕事は１０年以上のベテランであった。仕事もできるし、パソコンも使えるし、また月１回は家族のいない年配のためにボランティアもしている。どんなに疲れていても仕事をサボっているところを見たことがない。

「どっちのマニキュアの色がいい」、「彼氏と喧嘩したの」などの恋の悩みから、他人の裏話や悪口まで小林さんを訪ねて声をかけてくる人々で夜のラベル室は田舎の小さい市場のようになってしまう。どうしてなのだろう。年が年だから悪い意味では仲間の主的存在かと漠然と思っていたのだが、自分も今は彼女と一緒にいるだけで嫌なことは忘れ、まるでポカポカの日溜りの中で昼寝をしている猫のように気持ちよくなる。そしていつの間にか幸せだと感じている自分に気づいた。

国にいるときの私は仕事の面で几帳面にならなければいけなかった。そのせいか、いつも神経質で怖くて、きつい顔になって、若かった学生時代の朗らかな笑顔もだんだん消えていってしまった。私は自分らしくない顔だと思い、現実を逃げるように慌てて日本に来た。人間は年を取るとその人の生き方が顔に出るという話を聞いたことがある。怖い顔、きつい顔、やさしい顔。どんな生き方をすればいいのかな。私は年を取るにつれ避けられない自分の顔への責任が重くなった。

小林さんは人の心を和ませられる穏やかさ、優しさを持っている。決して、短くとは言えない人生を生きてきた小林さんにも、きっとたくさんの出来事があったと思う。嫌な事、つらい事など。それらをどのように乗り越えてきたのだろう。女性として、社会人として、人生の大先輩として７１年という道を歩んで、また歩み続けていく小林さんの魅力にもっと出会ってみたい。そのうち、３０歳を目の前にしている私自身への人生に対する答えもきっと見えてくるかもしれない。

（２）インタビュー

―戦争の中で―

インタビュー１回目。平成 15 年 11 月４日

姫　：小林さんは昭和４年生まれだよね？

小林：あんた、７年だよ。３歳も多くしたらダメなんじゃないの？（笑）

姫　：ホホホ、ごめんよ。小林さん、私より４２歳も年上だよ！すごい。

小林：そうだね、私はもう７１だし、母が９４歳だからね。母が２２歳の時、私を生んだの。アルツハイマー病で、今は私の顔も覚えてないけどね。

姫　：えっ？かわいそう。でも、まだ元気でいらしているからいいでしょう？

小林：そうじゃないのよ。周りが大変だから。今は病気で施設に入っているけど、以前は弟がずっと面倒をみてくれていたし。遺族年金や、個人の年金がおりて、月１５万円の支払いが出来るけど、それがなかったら子供たちが大変よ。

姫　：遺族年金？

小林：そうよ、小学３年生の時、「大東亜戦争」があったのね。東京大空襲の時はちょうど、新宿のヨドバシのところにいて、その時、高田馬場に空襲があって、B―２９戦闘機が私の頭の上を飛んできたわよ。かえるが蛇に飲まれるぐらいじっといたね。怖かったね。一番大変な時代で、波乱万丈の人生だったね。父が戦死しなかったら母も苦労なんかしなかったかもしれないしね。父は東京大学の法学部を出て、内務省に勤めたんだけど、K 建設にいる先輩に誘われて転職したのね。その時、早稲田大学で講師もしていて。でも、戦争招集令状が出て、フィリピンで戦死したよ。ずっと内務省に勤務していたら戦争なんか行かなかったかもしれないしね。

姫　：　そうなんだ。なんか『ほたるの墓』みたい。お父さんがなくなって大変だったでしょう？

小林：そうだね。戦争が終わって、父が帰ってくるかも知れないから、母の郷里の秋田から父の郷里の山口へ行ったのに、父の兄弟に私達親子はいじめられて大変だったのよ。結局、父は戦死してね。悔しいのが戦争は昭和２０年に終わったのに、何ヶ月前に召集され戦死したからね。今も記憶に残っているのはその時、お骨の中には遺骨がなく、紙切れに父の名前が書いてあるのがころころと転がっていたのね。何にもなくてただ紙切れ１枚だけだったのね。

―しばらく沈黙があった。―

小林：妹も弟も幼かったからね。妹は１１歳も年下だから私がおんぶしたりして子守りをして育てたのよ。長女だから母を手伝わなきゃならなかったのね。食べるものも食べられなくて過ごしたね。その時代は。

姫　：小林さんも大変だったじゃない。かわいそうに。長女だから諦めざるをえないものがたくさんあったでしょう。私なら嫌だな。

小林：嫌だけどしょうがないのよ。母一人で子供３人抱えて生きていけなきゃいけなかったからね。埼玉や、茨城まで母はよく物物交換をしに着物などを持って行ってたわよ。あ～懐かしくて涙がでちゃった。そんな時代を経て、やっと日本にも平和がきたのよ。勝ち目ない戦争というのはお互いが悪いけど、仕掛けたほうが悪いよ。日本が悪いよ。

（小林さんと話していると理由は分からないけど、自分も涙がでてしまった。小林さんの子供の時代を聞きたかったのだけど、そこにはあまりにも悲しい戦争の話があった。父を亡くして、苦労してきた小林さんの姿に、私は母の姿を重ねた。私の祖父は独立運動家で、私の母も小林さんのように父を亡くして、祖母が子供２人を抱えてすごく苦労したという。また祖母が病気で亡くなり、母は心の中に大きな穴がぽっかりあいてしまった様にいつも寂しかったと言っていた。私は戦争を知らないけど、その時代を乗り越えてきた人々に尊敬の念を感じた。私は年配の人に対して今まで敬遠してしまっていたかもしれない。彼女の話を聞いて、何かうまく言葉では説明出来ないが、深い衝撃を受け心がずっと痛かった。）

姫　：たしかに韓国では日本のことは悪く言っているし、私もその中で今まで教育を受けてきたよ。でも、私は戦争を起こして韓国を侵略してきた日本は憎まないよ。人間だから欲はだれでもあるから。私はただ日本人であれ、韓国人であれ、その戦争の中で愛する家族や友達を失った人々の事で胸が痛いです。

―この時の小林さんの涙がずっと胸に残ってしまった。―

―人生を楽しむこと―

インタビュー２回目。平成 15 年 11 月５日

姫　：小林さんの夢はなんだったの？若いころの。
小林：夢は弟と妹を一人前にすることだったね。弟は山口大学の経済まで、妹も短大まで出したからね。今は弟も立派に、妹も幼稚園の先生になったからね。それが夢だったのよ。幸せだったし。
姫　：それは小林さんの夢じゃないじゃん！あるいみ犠牲じゃない？
小林：犠牲だと思わないよ。長女としてのやるべきことだったし。私は高卒だったけど、いいところで就職できてよかったと思うよ。
姫　：でも、小林さんも大学行きたかったでしょう？
小林：しょうがないのよ。長女だからね。その時代はそうだったしね。高校まででも行けたから、それでいいのよ。
姫　：お父さんが戦死さえしなかったら、小林さんはある意味『お嬢様』になれかもね。
小林：そうだったかもね。でも、今になって思うのはそれで幸せになれたとは思わないのよ。人の人生とは、そして幸せとは決まっているものではないからね。

（誰かのためが夢だったと語るおばあさん。しかもそれが自分の幸せだったと言えるのは年のお陰なのか。私は誰かのための人生があったのかな。あえて言えば、家族か恋人か友

達ぐらいだったかも。年末、街の募金箱にお金を寄付するのも、神様に願いを言うことも、すべて自分の満足、自分の為だったのかも。いや、自分の為だけで精一杯だったかもしれない。多分すべてが。）

姫　：小林さんはお見合い結婚だったの？
小林：ううん。恋愛結婚だったよ。前務めていた会社の研究室の助手をしていた時に、主人の先輩の紹介で知り合ってね。
姫　：そんな時代も恋愛結婚あったんだ。すごい～！
小林：そうよ。主人は大学院で工学を研究していた人でね。結婚は私が２４歳の時したからね、もう４７・８年も一緒にいたのね。本当にあっと言う間だったね。
姫　：いいでしょう。幸せで。
小林：でも、結婚して７年間子供が出来なくて大変だったね。その時は私も仕事をしていたのであせらなかったけど、姑に言われてさ。結婚して３年間子供がないと当時は追い出されるぐらいだったからね。でも、子供は授かるものなので、いくら私をいじめたって思ったとおり出来ないことじゃない？

―しばらく、花とお茶の先生だったという御姑さんの話をした。―

姫　：結婚って大変だよね。赤の他人がひとつのものを作っていく作業ですれ違っていくこともたくさんあるし。
小林：そうだね。だから離婚したいと思ったときもあったのよ。でも、「子は鎹」って言うよね。子供が生まれては変わってきたしね。７年目に生んで、後、もう一人生まれて、今は婿もいて、孫も４人いて幸せだと思っているよ。
姫　：よかったね。幸せだから。私はね、ちょっと年を取るのが怖いの、もうすぐ３０歳になるのに何にもやっていない自分が嫌かも。
小林：何にもやってないって？あんた、今日本に来て一生懸命勉強しているし、生活しているし、いろんな人と出会っていいんじゃないの。それこそなかなか出来ないことじゃないの、よその国へ来て。年だってそんなに気にすることないよ。まだ若いんだから、いろんな人と出会ってまた付き合って、年を取ることを楽しんでいればいいと思うし。私なんて３０歳は怖くなかったね。仕事で忙しかったし、家庭では主婦のことで、また子供が生まれてからは母親としてのことがさらに増えたし。そのとき、そのときのことをちゃんとやっていくしかなかったからね。

（人生を楽しむこと。それは小林さんのその時、その時自分のやるべきことをきちんとやっていくことなのかな。それが人生を楽しめる方法なのかもしれない。人生も幸せも決まってないものだから。）

－自分に感謝－

インタビュー３回目。平成 15 年 11 月６日

姫　：夜の仕事大変じゃない？私は心配なの。

小林：なんで心配するのよ。年だから？（笑）仕事って私の生きる上でなくてはならないことなのよ。戦争の時からいままでずっと体を動いてきたからね。体を動かさないと生きている気がしないでしょう！

姫　：でも、疲れている時は「今日は休みたいな～」と思う時があるでしょう。で、ズル休みしたり。

小林：あんた、それは誰でもが思うけど、そんなことはしないよ。他人に迷惑だから。今は年だけど、年だからといってやさしい仕事だけなんてできないし、そんなことしたくもないしね。

姫　：姫の大先輩だね。思えば、小林さんは何十年も働いてきたね？ボランティアはいつからしたの？

小林：初めて働いたのが１９歳の時からだね。結婚して子供ができても、姑が病気だった時も面倒みながら仕事は続けてきたしね。お金より自分の為だったのかもよ。主人が研究員で社宅だったし、給料もよかったけどね。今の仕事は定年してから家も近いし姑が亡くなってから夜が長くてね、それで始めたのよ。ちょうどその時、ボランティアも始めたのね。もう１４年になるのよ。朝、仕事を終えて家へ帰って主婦としての仕事をして、また新聞とか本を読んで朝の時間を過ごしたりね。今はこの生活に慣れていて良いのだけど、娘達と主人は仕事やめてね！と姫ちゃんみたくうるさくてさ。仕事がなんであれ、今はこの仕事で、元気で頑張っている自分に感謝しているのよ。

（自分に感謝！・・したことないかも、私は。「男はつらいよ」ではなく「仕事はつらいよ」だと思っていたのに、しかも、そんな自分に感謝なんって。小林さんは仕事が辛いと思わずに、体を動かして一生懸命な自分のことを楽しんでいるようにみえた。それがつらいと思う前に頑張ろうという気持ちになって感謝までいたったのかも。私の考えは「仕事」は「仕事」だった。仕事はつらいとよく言ったのは本当につらかったからではなく、仕事だから辛いと思ったからかも。厳しい顔になったと思ったのも仕事のせいにしたと思う。）

姫　：人がたくさんいるこの会社みたいなところは大変そう。でも、小林さんはみんなと仲良く、いつも笑顔でいるから、何か羨ましいな。

小林：人がいるところって嫉妬も喧嘩も裏話もたくさんあるでしょう？そういう中でうまくやっていかないと仕事より人間関係に疲れてしまうのよね！一番良いのは素直に

人と接することだよね。素直っていうのはでしゃばったりせずに人と付き合うことだと思うよ。そして、人を信じる事、愛する気持ちだと思うよ。今の会社の人達は家族のように大切だと私は思っているのよ。

（そうだ、そうだ！今思えば、私の一番嫌な事とは人の意見に左右されることだ。私は国で働いていた時に会社で仕事仲間の間で、何とも思っていない人を悪く思ったり、一緒に悪口を言ってしまっていたと思う。そういう仲間内の掟みたいなのを従わなければいけなかったのが嫌だったのかもしれない。それで、国にいた時の自分が自分らしくないと思っていたのかもしれない。私が小林さんに感じている穏やかさとは多分、こういう思いがあったからかもしれない。）

（３）結論

「ほたるの墓」というアニメを３歳だった姪子と一緒に観た事がある。その時、日本語はもちろん、韓国語の字幕さえ読めず、戦争の事は何ひとつ知らないはずの姪子はそのアニメを観ながら涙を流していた。その時の姪子のように私もインタビューの初日、感動につつまれ涙を流してしまった。生まれて初めて戦争を経験した年配の人と戦争に対して話しをした。しかも、私とは国も違う、日本人の立場での戦争の話は初めてだった。戦争の事はテレビの中や、教科書の中でしか接した事のない私に、小林さんの話は衝撃的だった。ただ、私は戦争の話で涙を流したのではなく、その中での小林さんの人生というものを聞くことができ、また何かに気づかされたからだ。私は戦争というのは、韓国人が一番辛い思いをしたのだと今まで思っていたのかもしれない。でも、それは間違っていた。どこの国でも、何人でも同じなのだ。体が震えて、悲しくなった。私が誰よりも大切だと思っている小林さんは日本人なのだ。子供の時から受けてきた教育の中での残酷な日本人像というものが彼女には見つけられなく、想像も出来ないくらい優しくて、心が温かい人なのだ。日本人である小林さんは何十年も前に戦争で父を亡くした。また韓国人である私の母は何十年も前に顔すら覚えてない父を亡くした。戦争で愛する家族を失うことは誰でも辛い事なのだ。韓国人だから、日本人だから、そういう事は私にはもう何の問題にならない。その二人を心から愛する私は、何人に関係なく胸が痛いほど悲しくなった。小林さんの涙がずっと心の中を痛くしてしまった。いくらお互いを殺しあう戦争があっても人と人の心の愛は殺せないのだ。今も韓国の８月１５日は、日本の植民下の韓国人が日本人に虐殺される内容のドラマや映画一色だ。「もうそんなことやめてよ」心の中から叫び続けていてもその声はまだ届かない。でも、叫び続けるといつかは届くだろう。私のインタビューはこんな思いから始まった。

このインタビューを始める前の私にとって小林さんはいつも笑顔で、優しくて穏やかな

「癒し系」そのものであった。しかし、インタビューを終えて、私の考えは変わってしまった。私にとって小林さんはもう、ただの「癒し系」だけではない。年を取って、また今を生きている小林さんは、「個人」という人との関係を素直に接し、自分を成長しながら生きてきたと思う。それで、自分らしく生きていくうちに、小林さんなりの穏やかさや、人を包み込むような魅力を持つようになったのだ。インタビューをする前の私は、何かを求めていた。何かを探し続けていた。それは年を取っていく恐ろしい気分と共に、年を重ねてきた小林さんから人生に対する解答を求めていたと思う。でも、その答えは自分自身の中にあったのだ。

私は年を取っていく事をすごく怖がっていた。「２９・・・二十苦」何にもやっていない、何にもやっていないのに年ばかり取っていく自分が嫌で、苦しかった。しかし小林さんは日本に来て勉強と生活をしている私を褒めてくれた。「それこそ誰もができないじゃない！」と。私は誰もが出来ることをやっているのではなく、私しか出来ないことをやっているのだと。「そうかな・・そうかな・・そうかも・・そうだ」これから３０歳４０歳５０歳・・ずっと生きていく私にこの日本での経験はかけがえのないことに違いない。そう思った瞬間、気分が楽になった。しかも何でもできそうな気もした。確かに、最近は何にもかもが楽しく、感謝する気分だ。「日本での生活はもう４年だぞ！」、「渋谷の地理知らなかったら私に聞いて、教えてあげるから」こんなに陽気な気持ちになれたのは、自分の一日一日が大切な事なのだと、気付いたからだ。最初、日本に来た時、滞在期間は１年という計画だった。「人生、６０歳まで生きていくうえで１年はたいしたことではない、１年ぐらいは」。人生の中で１年ぐらいだなんて、人生は６０歳だと自分勝手に決めたのだ。愚かな発想だった。こんな考えがあったから年配の人を敬遠していたのかもしれない。その人々の年の大事さを始めてわかるような気がした。１年は大事だ。１日、１日が３６５回合わせて出来上がった貴重な時間だ。その時間を過ごしてきている人生の大先輩の方々を「年なのに」、「いじわるそう」といった言葉で表した自分に反省もした。もうこんな考えはしない。

私は人を愛する事は、信じる事は、この世の中で一番大事な事だと思うようになった。またそれは一番自分らしさでいられることに違いないのだ。人を愛する気持ちがないと、人を信じないと自分の事も信用できなくなるからだ。人間の手の指は５本あって、誰かを悪く言う時、その人に向いた指は１本で、残りの４本は自分にむいてあるのだという。それと同じく、人を信じなく、愛さないと自分の人生は決して豊かになれないのだ。自分をごまかさず素直に接していこう。またそれは自分に感謝するという気持ちに繋がり、自分のその瞬間（とき）を大事にし、仕事であれ、人間関係であれ、何でも楽しく自分らしく生きていけるようにしてくれるのだ。新たに私が小林さんに感じた魅力は、心の底にあるこういう気持ちの大切さや、そこから生まれてくる素直さで、そんなに穏やかになれたことだった。

かつて、曾我量深は「往生の『生』は『生まれる』というほかに『生きる』という意味がある」と言った。人は生まれてどんな生き方をしていくのだろう。それは決まっている

ことではなく、その瞬間を大事にしながら呼吸ながら自ら決めていくことだろう。木は年を取ると年輪が増えていく。年数が経てば経つほど、その数は増えてくるのだ。人間も同じだ。年を取るに連れ増えるシワは『年の勲章』のようで、その数やその深さこそ自分の顔への責任になるのだ。だから、どんな勲章を貰えるのかは自分次第だ。どんな生き方がいいのか決めずに、今を楽しく生きていこう。頑張っていこう。

私にとって人生に対する気分は私が大好きな油絵を画く作業のようだ。何にも画いてない白いキャンバスの上に、スケッチをし、また色を塗っていく作業。気にいらないところにはもっと色を加えたり、明るくしたり私は何時間をかけて作業を真剣に楽しんでいくのだ。今の私はイゼルの前で、スケッチをしている最中だ。どんな絵が出来上がるか楽しみでわくわくしてきた。でも、焦ることなく絵を画く作業を楽しんでいる。どんな絵が完成するのかまだわからないけど、その作業を楽しんでいこう。

2004 年４月４日は私が３０歳になる日だ。２９歳になった時の４月４日は私にとって「死ぬの４」のようだった。でも、今年の４月４日は「幸せの４」になるに違いない。なぜならば、その日まで私は今を頑張っていくからだ。楽しんでいくからだ。それが３０歳を目の前にしている私への答えだ。７０歳の私はどんな顔になるのだろう。年を取ることはもう怖くない。この人に出会ってからは。

（４）終わりに

「想像画」・・・「地球と宇宙」に関して、想像して描きなさい。と先生は黒板に大きな字で書いた。当時、小学１年生だった私は考えたことのないテーマで、しばらく考え込んだ後、大きくて、丸い家を画いた。屋根は魚の模様で、その家にはたくさんの部屋があって、ドアーはすべて花模様だ。私もその家に住んでいて、父は黒人で、母はなぜかインドの女性のように額にほくろをつけて、私はきれいで、金髪の女の子だ。そしてその家の隣は宇宙という遊園地があって、E/T もロボットも会える世界で、あそこまではモノレルで繋がっていて、いつでもいけるどこだ。背景はたくさんの木がある緑の世界だ。でたらめな私の想像画は教室の後ろに掲げられて、その絵の説明を書いたところに、丸くて、花模様の部屋はいろんな国の部屋で、いつでもノックしたら、会えてみんなが仲良く暮らせるお家だと書いたと思う。多分、幼かった私はテレビ映画の吹き替えで、西洋人が韓国語で話しているのを観ながら、なんの問題なく、自然に話せると思ったと思う。それで、西洋人でも、東洋人でも同じだと思ってそんな想像をしたのと思う。しかし、教育を受けながら、大きくなればなるほど、国と国の間には言葉と文化の差があるということを分かってきた。
それだけではなく、偏見や、ステレオタイプというものの存在も。
何故か、子供の時の思いが恋しくなった。もし、今、そんな想像画を描くとしたら、
そんなふうに描けられるのかな。多分、頭の中では、地球という地図が広がっていくかも

しれない。
今回の小林さんのインタビューを終えてからずっと胸に残っているのは、「韓国人」、「日本人」という言葉の無気力さと「国」という無意味だった。今、日本で生活している私にとって、韓国という国籍も日本という社会も何一つ重要ではない。どこで生まれたかより、今、自分自身がどこで生きているという事が大事なのだ。私は時々、韓国人の友達に言われる。「心酔」だと。日本がそんなに好きかと。余計なお世話だけど、そうではなく、私は日本が好きというよりも、今の自分を好きなだけだ。自分を大事にしながら生きているのに、人の目にはそういうふうに映ってしまっているのかもしれない。どこへ行っても、どんな社会に暮らしていても、変わらない自分がいる。そしてこの様な考え方は、人と一対一で出会えると思う。今回、小林さんとの出会い、そしてインタビューは私に「個」という大事さを教えてくれた。また、ちょっと大げさかもしれないけど、人類の「愛」も考えるようになった。地震・飢餓・戦争・環境問題、特にストリートチルドレンのために私が出来ることとはなにかと。ささやかだけどボランティアも始めてみた。
「個人」という言葉は、一見「I・MY・ME・MINE」的な自分中心的な言葉のように聞こえるかもしれないけど、コミュニケーションでの「個人」というのは人を尊重し、お互いに信頼しながら、また自分を表現し、育てていくことだ。
想像画を描いてみよう。部屋をノックしてもいいし、部屋から出てくる誰かでも構わない。お花模様の部屋にはまだ出会えていない、たくさんの人々がいる。

私はこのクラスの活動に参加できたことを感謝している。なぜなら、GBK の授業の時、ずっと頭の中で、くるくる回っていた「個の文化」ということに対して、この活動を通して深く考えることができたからだ。

私は小林さんに出会えたことを言葉で表現できないほど感謝している。出会えなかったら感じることが出来なかったと思う、今のこの気持ち。小林さんがいつまでも元気でいる事を祈りながら、このレポートを小林さんへのプレゼントとしたい。

２００４年1月１８日
姫